

ホトトギス

六月号

ホトトギス

昭和二十五年三月二十八日運輸省特別政承認証第第六二七号
平成二十二年六月一日発行(第百十四号第六号)



俳句随想 〔三百四十八〕

汀子

東日本大震災は大変な災害となり、死者、不明者合わせて三万にも達する被害を告げている。加えて原子力発電の事故である。放射能が洩れだし収拾のつかない大惨事となりそうな恐ろしい現実である。被害に遭われた方々には慰めの言葉も無く、我々が出来る限りのお見舞いと思っても何が出来るだろうか。

俳句は自然を詠み、人間を詠み、人間の生活を詠む短い詩である。何程の事も言えない俳句であっても、季題が事柄を代弁して大きな事を一句の背景として伝える事も出来る。

今回、地震、津波、原発の脅威などを詠もうとしても、よほど季題を考えて季題に思いを托さねばならない。ニュース性のある事柄を詠むのは、社会性俳句と言って花鳥諷詠俳句とは違うかも知れない。しかし、この度の災害は人間の生活の中に土足で踏み込んで来た自然の姿でもあるように思う。原発は人災であるが、それでも、地震や津波で放射能が洩れだしたのであるから、自然の脅威の下で起こった事に違いないのである。

十六年前の阪神淡路大震災の渦中にあった我々は仲間たちと共に沢山俳句を作った。俳句を作ること、心が冷静になれた。今回も災害を直視して、自然と向き合いたいと思う。すでに多くの人が大震災の俳句を作って被災された方々と悲しみを分け合っている。

旬日記 汀子

平成二十二年六月五日 菅屋ホトギス会

万緑の息をつなぎてゆく旅路

鈴蘭の野へつながりし旅心

蚊のためにあるやうな庭なりしかな

六月六日 下萌句会

きざはしを天につなぎて雨蛙

活けられて十葉の花らしからず

雨蛙跳ぶ態勢のととのひし

快晴の朝かしこまる雨蛙

六月七日 ロイヤル俳壇

学び舎は花アカシヤの坂の上

五月雨を憂しとせざりし家居かな

峡宿の山女の膳に揃ひけり

あらそへぬ年齢の枷五月雨る

さつさうと零の出發ライラック

六月八日 大阪倶楽部

上京の朝自ら明易し

短夜の寝足りし朝でありしかな

カーテンに夢と現実明易し

入梅の日と旅の日と実なりぬ

寝返ればつづかぬ夢よ明易し

又一つ実梅ころころ芝の中

六月八日 綿業倶楽部

ががんほの逃げたき音と知るまでは

怖るるはががんほの方なりしかな

鈴蘭の香り東ねて渡さるる

六月十日 清交社

見えてゐて見失ひたる蝸牛

蝸牛飼ひみまかりし友のこと

伝説はすべて悲しき杜若

銀の跡曳く所在蝸牛

五月 闇 深し 明るき 一と 所

六月十一日 工業倶楽部

さう思ひまだかと思ふ梅雨入かな

山荘は廢居となりぬ

棲む墓に明け渡したる山の荘

足許にかしこまりたる墓

一八とその名を知りて引返す

六月十二日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

緑抜け緑カーブよ又カーブ

暑すぐな顔が写されをりにけり

汗すぐに引く風山の高さか

きんぼうげ黄色が飛んで運転す

花を見てやはり朴の木なりしかな

六月十三日 北近畿ホトギス俳句大会

誰彼を偲ぶ波音梅雨に入る

入江なす天の橋立夏燕

六月十五日 有恒倶楽部

雨似合ふ水辺の似合ふ花菖蒲

蚊遣火を焚きてはじまる庭仕事

狭庭よりははじまつてをり青嵐

六甲を吹きおろしたる青嵐

露涼しはやぶさ帰還せし快拳

六月十五日 無名会

星を見るきざはし閉ざし梅雨籠

二日来し庭師目こぼし梅雨茸

木天蓼の山路に出れば迷はずに

はやぶさの快拳に消ゆる梅雨の居さ

梅雨茸蹴つて通りし人の居て

木天蓼や三瓶の旅の近づきぬ

帰りにはあとかたもなし梅雨茸

木天蓼や旅路彩るものとして

六月十六日 夏潮句会

合歡の花天蓋なせる水の音

六甲をつなぐ木々あり青嵐

木洩日の揺れて尽きざる青嵐

六月二十一日 アサヒカルチャー

夏至と聞きつゝ一日の過し方

夏至とても時間は待つてくれざりし

六月二十四日 きつらぎ

潮風に紛るる香あり花蜜柑

夏霞裾曳く富士の山俯瞰

蛭の里と呼ばれし室生路へ

梅雨とても降らぬ憂さどてありぬべし

六月二十五日 時雨会

満天の星降りて来し蛭かな

サツカーを見て一と眠り明易き

忽ちに海へ届きぬ夏の川

杜若三瓶の旅も旬日に

御祓川水音高き所かな

六月二十六日 句会と講演会

鯨料るとき骨の処置など決め手

若竹の紛るる早さありにけり

タワいの灯青く点りて涼しきよ

梅雨憂しとせぬ解答は大胆に

六月二十八日 春菜会

ふり返る過去を引寄せ露涼し

記憶とて定かならねど梅雨曇

おしやべりは女の時間明易し

夏瘦の期待もうなし春菜会

又一つ年を重ねて梅雨に会ふ

六月二十九日 春菜会

久闊とていふも一年露涼し

現れて梅雨の太陽なりしかな

若き日を汗の真顔の語りけり

青芝に語り尽せぬ日となりぬ

昨日より今日の梅雨晴信じられ

会場の鯨語にも汗の対処かな

梅雨霧の海を閉ざせる早さかな

うろろうると右往左往や梅雨の鯨語

廣太郎句帳

廣太郎

六月七日 はせを句会

賀の人を涼しく迎へたる句会
やませ吹く中披かる句碑の文字
山梔子の花とんがつてゆく朝
青薔薇の香に祝ぎ心昂れり

六月十日 土筆会

喪の旅の三日目となる徹の宿
霰降つて都心止まつてをりにけり
軽幌の子に親の視線といふ呪縛

六月十一日 六甲会

芦屋市に生れて鳥の子の運命
一輪の未央柳に偲ぶ人
鳥の子三百年の松の上
梯は未央柳に佇てばなほ

その中の君はヨハネか鳥の子
未央柳佳人談義もたけなほに
虚子館の未央柳は風が好き
未央柳若き主宰の輝きに
六月十一日 虚子記念文学館投句

合歓咲いて星のきざはしてふ角度
六月十二、十三日 北近畿ホトギス俳句大会

夏館美女と野獣の足湯かな
その中のシテめく時鳥孤高
時鳥鳴くからちよつとお静かに
土器の万緑に吸ひ込まれゆく
美しき佳人の涙灯涼し
六月十四日 朝日カルチャー若草句会

五月雨や旅の余韻を持ち寄りて
南吹く六甲の木々騒がせて
鶯の笛南風に溶けてゆきにけり
五月雨に二級河川の膨めり
六月十五日 草木瓜会

梅雨寒を来て一献に潤へり
紫陽花の空恋ふ色でありにけり
梅雨寒や東京都心灰色に
六月十七日 登高会

芦屋川目高の見えてくる仔細
役一つ終へて形代流しけり
一水を揺らして目高増えゆける
手を繋ぐやうに形代流れゆく
六月二十日 若水句会

勝馬に湯気といふ伽ありにけり
ダービーの空に夢散る馬券かな
父の日や子供は居るだけで宝
父逝きて三十年や父の日に
六月二十三日 目黒学園句会

ベゴニアの葉に彩りのありにけり
この里も水鶏絶滅したといふ
夏帽を振りて帰らぬ旅となる
夏帽子遺されてある書齋かな
ベゴニアを咲かせブラジル領事館
過疎の村水鶏の声に暮れゆけり
六月二十六日 ホトギス社句会

ロンンの居ぬ庭淋しめず今年竹
この鱒は釣つて来たことにしといて
六月二十七日 野分会東京例会

五月闇新人賞が払ひゆく
五月闇らふそく能に解けゆく
六月三十日 「俳句研究」秋の作品集
終戦の日より仕舞はれたるラジオ
マエストロ秋思のアインザツツかな
神の手に引かれる如く鷹渡る
檸檬育て平家の裔を誇りとす
初鳴や近つ淡海を斜交ひに

平成二十二年六月一日 カトリック新聞選者吟
衣更へて折りの人となりゆけり
六月三日 蕉心会
打水をして下町の出来上る
白靴の彦様じつと川を見る
をばちやんの日傘階段塞ぎけり
蜘蛛の囿の下町風といふ角度
猫知らんぶり片陰を離れざる
万緑を競ひ合ひたる館の庭
橋涼しスカイツリーの見えてより
花栗の香りてよりの会話かな
六月三日 元ルートの会
葉隠れといふ夏蝶の吐息かな
川の水涼しく揺れてをりにけり
丸ビルを出で涼しさといふ出会
青嵐めくビル街の騒きかな
六月五日 内原弘美様御見舞
夕虹を君と仰げる日も近し
六月六日 野分会音屋例会
燕の子明日は飛翔といふ構へ
五月闇抜け真つ新な朝かな

雑詠

廣太郎 選

寒菊を活け震災の忌を修す 芦屋 小田ひろ
 震災の忌日を修し春を待つ 同
 歳月の過ぎゆく早さ寒の月 同
 住み慣れし京あがりてふ絵双六 京都 安原 葉
 悲しみも甦りくる春近し 同
 凍蝶の日に舞ふ願潰えしか 同
 戎笹 大阪 弁の 渦に 買ふ 高槻 会田仁子
 スケーター恋の時間を廻りけり 同
 手袋をはづしてよりの本気かな 同
 数へ日を天命捲る如くにも 福山 竹下陶子
 初日いま高天原を躍り出づ 同
 左義長や里には平家物語 同
 編棒を踊らせてゐる冬日向 神戸 山田佳乃
 短日やあちらこちらに知らぬ傷 同
 網代垣まつすぐ女礼者来る 同
 母すでに起きて淑氣の厨かな 龍ヶ崎 今橋眞理子
 買初や三越前でどつと降り 同
 買初や遊び心のもの少し 同

寒造杜氏は温度と闘へる 奈良 古賀しぐれ
 冴返り冴返り酒醸さるる 同
 酒蔵の大梁哭かせ冴返る 同
 常夏の島より女礼者かな 東京 大久保白村
 マウイより来て初旅の友となる 同
 人は首枯木は幹に名札下げ 同
 老虚子に浅間風の隙間風 相模原 木村享史
 隙間風遺影はいつもそこにあり 同
 クリスマスカード地球の裏に友 同
 歩を留めぬて底冷のくつきぬ 香川 湯川 雅
 寒林の影乱す影ありにけり 同
 梅一輪ごとに日向を切りとりぬ 同
 耐へてゐる色には見えず寒牡丹 八尾 山下美典
 七種といふも雑草めきしもの 同
 立春の上昇気流鳶舞へり 同
 うす雲を呼ぶこと好きな春の空 東京 橋本くに彦
 名園に点景残し春の雪 同
 海へ出る船を押し出し雪解川 同
 うすらひとうすらひの影ちよつとずれ 柏 田丸千種
 薄氷の透明水の透明へ 同
 鷹去りし中天の藍深きかな 同
 一村が雪解雫の中にあり 檀原 稲岡 長
 屋根の雪生活を籠めて音も無し 同
 春の旅人語を欲りて奥丹後 同

雑詠句評（五月号より）

惠明・芳子・中正

眞理子・保佳・静龍

美奇・むつみ・千鶴子

とほ歩・葉・廣太郎

初夢はかなしきことをなつかしく 榎原 稲岡 長

元旦の夜から二日にかけてみる夢が初夢。宝船の絵を枕の下に敷いてよい夢を願うこともする。この句は、そういう夢ではない。夢の中に、意識の奥の想い出がふっとあらわれてきて驚かされる。「かなしい」は、感情の身にしみて切ないこと。つらくて心のいたむ悲哀にも、いとしい愛憐にも使う。この句の「かなしき」には、両方のかなしみの入り混ったひびきがある。かなえられない願望を果したいと一途になったこともあったが、今は全てが、懐かしい想い出となつてよみがえってくる。それでよかったと、ふり返る。人生の深い哀歎を、さりげなくまとめあげられた。

（惠明）

一般的には「初夢」は楽しいもので、正月をうきうきと過ごせるひとつのイベントのようなものだろう。でも、勿論この句のように楽しい内容の夢ばかりではないだろう。深読みのし過ぎかも知れないが、どうしても作者の御嬢様が夢に出てこられたのではないかと、しみじみと思つてしまう。（廣太郎）

虹に逢ひ虹に別れし出合ひかな 東京 川口利夫

虹といえば虚子の虹の句が浮ぶ。傍くも美しい自然現象の出逢いである。作者はドライブされていた時であろうか、偶々行く手に美しい虹を見られたその時の感動！なかなか見れない虹に逢い得たよろこびと、虹の消えてゆく倅しさ、しばしの出合ひに、作者はきつと亡き愛妻咲子様を心にえがかれたであろう。よく山会のお文章にも書かれているが、若く美しい奥様の事をなつかしく切なく思い出されたと思う。虹は幻想的である。心に残る一句と思う。（芳子）

旅の一シーンであろうか。御本人か、あるいは旅で来られた方との出合いの時丁度「虹」が立ち、何日か楽しく過ごした後いよいよ別れる時も虹が立ったのである。何ともドラマチックな出会いと別れであり、季節が効果的に作用している。物語の主人公を見ているようである。（廣太郎）（以下略）

天地有情

江子選

静夫忌へ駆る荒るるとも凍つるとも
歲月は古り炉の思ひ出は古りず
心また旅を恋ひぬるクリスマス
年行きていくさ果てたるごとくなり
太陽の黒点目差す冬木の芽
焚火跡人類ここに誕生す
雪国の春一番といふ便り
薄氷に雲一片もなき朝
庄屋とし真先に絵を踏みにけり
ちぢれ毛を疑はれたる絵踏かな
宝船敷きて三施の外にをり
老とても確と充電三ヶ日
そむけたる面輪に写る焚火かな
退院の電話のありて日脚伸ぶ
凧に磨かれ残る星一つ
文化財なれば詮なし隙間風
紅梅のことにけぶりて遥かなる
肩寄せて小さき地藏春を待つ

金沢 藤浦昭代
同
熊本 岩岡中正
同
東京 稲畑廣太郎
同
京都 安原 葉
同
神戸 三村純也
同
同 後藤比奈夫
同
たつの 浅井青陽子
同
相模原 木村享史
同
東京 今井千鶴子
同

雪解水混る野川も温み初む
春泥に踏み込みてさへ思ふこと
たもとほるものみな春の匂ひして
梅暮れてうすくれなぬの香の残る
探梅に城の青空ついて来る
城の黙梅の黙解き日本晴
外燈を通るとき雪大となる
見下ろしの景のスケート人の渦
今年また海にとび出て初日の出
箱根路を登る駅伝見に二日
百寿訪ふ礼者卒寿でありにけり
氷柱せし庭解けたる水の音
悴める手に絶筆を受け取りぬ
笹鳴を聞きしと思ふ森の風
磯宮の開かれぬしは年用意
数へ日を里人寄りて宮掃除
まつしぐら出世街道絵双六
泣き虫も勝気も一緒絵双六

榎原 稲岡 長
同
神戸 長山あや
同
奈良 古賀しぐれ
同
熱海 嶋田摩耶子
同
同 嶋田一歩
同
吹田 宮崎 正
同
箕面 井上浩一郎
同
徳島 上崎暮潮
同
東京 河野美奇
同

天地有情句評

汀子

薄氷に雲一片もなき朝 京都 安原 葉

放射冷却の朝。

ちぢれ毛を疑はれたる絵踏かな 神戸 三村純也

キリスト教迫害の歴史。

老とても確と充電三ケ日 神戸 後藤比奈夫

大切に過ごす三ケ日。

退院の電話のありて日脚伸び たつの 浅井青陽子

安堵。

文化財なれば詮なし隙間風 相模原 木村享史

静夫忌へ駆る荒るるとも凍つるとも 金沢 藤浦昭代

辻口静夫さんを悼む心切。

年行きていくさ果てたるごとくなり 熊本 岩岡中正

平和への願望。

焚火跡人類ここに誕生す 東京 稲畑廣太郎

自然の中に生きて来た人間の歴史。

時代と共に。